R O S É

文化・交流—新しい地域創造

ロゼ

文化情報誌 ロゼ

Art information of Fuji city

Culture Magazine ROSÉ

Vol.3 SPRING 1993

春号

Vol.3

ROSÉ
THEATRE

ロゼ 富士市文化情報誌 ロゼ 1993年5月発行(第3号)
発行 富士市文化振興財団 〒417 富士市永田町1丁目100番地 TEL(0545)51-0123㈹
企画・編集 富士市文化振興財団 アドスペース エービック株式会社

ロゼシアター・オープニング特別プログラム
『ウィーン・フォルクスオーパー管弦楽団ガラ・コンサート』

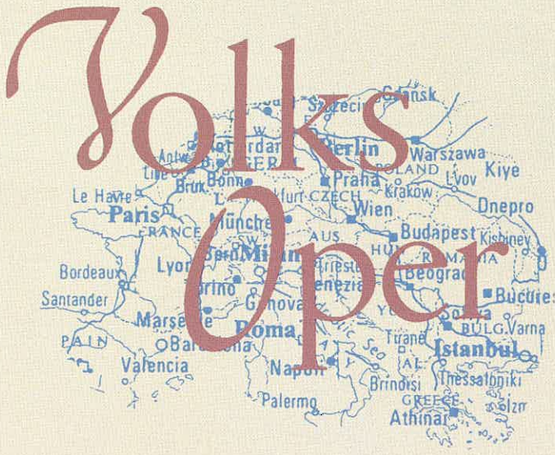
ロゼ開花の初日は、オペレッタで華やかに幕明け。

いよいよ間近に迫ったオープニング・デイ、十一月一日の初日を飾るのはフォルクスオーパー管弦楽団によるオペレッタ公演、これはロゼシアターオープンのために、特別に編成されたプログラムで行われます。

このコンサートは、ウィーン国立歌劇場との間で二年近くをかけてスケジュール調整を行い、来富が決まったものです。

世界の超一流オーケストラ、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団で有名なオーストリアのウィーンはオペラが盛んなところです。

フォルクスオーパー管弦楽団は、このウィーンにある国立歌劇場の専属でオペレッタを主要演目とするオーケストラです。



■メラニー・ホリディ

ヒューストンに生まれ、子供の頃からバレエを学び、インディアナ大学で声楽を専攻した。1973年ヨーロッパに渡り、クラーゲンフルト、次いでバーセルとマインツの歌劇場を経て、1977年からウィーン・フォルクスオーパーの専属となった。

オペラ、オペレッタ、ミュージカルと多彩なレパートリーを誇り、フォルクスオーパーのデビューを飾った「こうもり」のアデーレ、「メリー・ウイドウ」のヴァランシェンヌ、「キス・ミー・ケイト」のビアンカ等を得意とし、1990年の新演出「ルクセンブルク伯爵」では主役のアンジェルに抜擢され、今もって歌・芝居・踊りと三拍子揃った見事なエンターティナーぶりを発揮している。シュターツオパーでは、バーンスタインの「マース」に出演し、好評を得ている。更にはヨーロッパ各地に客演。テレビ出演も多く、ルドルフ・ショックやルネ・コロとも共演している。

また、アメリカ、日本におけるフォルクスオパーの公演で評判となり、特に日本では度重なる来日ですっかり人気を独占している。

このワルツの王様は、オペレッタの世界でも名作を数多く残しました。一八七四年に作られた〝こうもり―酒の歌〟などは男声・女声のかけ合いで歌われ、当時酒好きのウィーンっ子たちを熱狂させ、初演にもかかわらずウィーン劇場は嵐のような拍手に包まれたと言われています。この曲はウイーンにオペレッタの黄金時代を築いた記念碑的な作品となりました。（この曲は、先のワルツとともにロゼシアターで演奏される予定です）

ロゼシアターのための特別プログラム、ガラ（祝祭）コンサート

十一月に富士市で行われるオペレッタ公演は、別名ガラ・コンサートとよばれるプログラムとなっています。これはロゼシアターだけでしか行われない特別な催し物で、オープンにちなんで祝祭事的な演出が盛り込まれた楽しいコンサートになる筈です。多くのレパートリーの中からハイライトシーンを選び、数多く演奏しようとする企画で、聴く方にとっては願ってもないコンサートになります。

庶民の楽しみとして誕生したオペレッタ

オペラが歌劇とよばれているように、オペレッタは喜歌劇とよばれています。現在では舞台で歌手がある種の様式美のもとに演ずる舞台芸術となっていますが、かつてはオペラが貴族にもてはやされていた時、庶民が楽しむ音楽として誕生したのがオペレッタでした。ですから一面では、街中が浮かれ、踊るカーニバルのようなものともいわれています。十九世紀のウィーンにはヨーロッパ各地からいろいろな人種が移住してきて音楽を楽しんでいました。これらの人たちが歌い、踊ったのがのちのウィンナ・ワルツといわれているものです。こうしてオペレッタとワルツは十九世紀から二十世紀にかけてウィーン音楽として確立されました。

ヨハン・シュトラウスの名曲がロゼシアターに響く

このワルツを舞踊音楽から鑑賞音楽に発展させたのが日本でも有名なヨハン・シュトラウスII世です。なかでも〝美しく青きドナウ〟、〝春の声〟などは多くの人々に愛されています。毎年ウィーンで行われている新春恒例のニューイヤーコンサートのテーマ曲ともいえるこれらのワルツは、富士市のロゼシアターの開幕を飾るに誠にふさわしい音楽といえましょう。

ウィーンにおけるフォルクスオーパー

夢のウィーンの音にオペレッタ界の華が咲く

この度、はるか遠い西ヨーロッパから来日するフォルクスオーパー管弦楽団一行は六十名余、そのなかには世界的に名高いオペレッタ界の華、メラニー・ホリディが入っております。彼女はアメリカ生まれで、ヨーロッパにおいて舞台経験を積み、名声を得ました。現在では、オペラ、オペレッタ、ミュージカルと多彩なレパートリーを誇り、世界各国に客演、映画・テレビにも数多く出演し、日本にも一九八八年サントリーホール・ニューイヤーコンサートに出演したのを皮切りに三回の来日をはたし、人気を独占しています。

この時期、ほかでは不可能な企画が富士市で実現

冒頭、この公演はロゼシアター・オープン記念のガラ（祭）コンサートであると述べましたが、この企画の実現は、東京で音楽プロモート会社を経営する日下部勝徳氏（三十才）の力に負うところが大です。氏は富士市出身で、元国立音楽大学卒のトロンボーン奏者でしたが、現在では〝文化を応援する〟を大きな理念として主に地方公共団体を対象にコンサートの企画を行っています。今回の富士市文化会館の開館記念に際し、特別ご尽力をいただきました。この時期にこのようなコンサートは他では一切不可能とのことです。十一月一日はウィーンの名門オペラが富士市で味わえる素晴らしい一夜となることを財団からみなさんにお約束いたします。

躍動・静寂・笑い・涙……
もうすぐ、さまざまな感動に出会えます。

ロゼシアターのオープニングに向かい、カウントダウンが始まりました。
和・洋・東・西のトップアーティストが、
このロゼシアターのホールで会えるなんて夢のようです。
クラシック・オペラ・ポップス・演劇etc…と、
さまざまなジャンルの芸術が私たちの目の前に現れます。
新しいホールで〝観る・聴く・感じる〟ことの素晴らしさを
一人でも多くの市民の方に味わっていただきたく、
ここに主な公演スケジュールと内容をご紹介します。

芹　洋子

さとう宗幸

ステージと一つになって歌おう
芹洋子ファミリーコンサート
●十一月三日㈬　大ホール

十一月の空の下、芹洋子さんの澄んだ声が大ホールに響き渡ります。「四季の歌」や「坊がつる讃歌」の大ヒットで、子供からお年寄りまで、幅広いファン層をもつ芹さん。現在は童謡を中心にテレビ出演やコンサートなど、幅広い音楽活動を展開しています。

今回は、ゲストに「青葉城恋唄」のさとう宗幸さんを招き、親しみのある歌の数々を歌っていただきます。爽やかな歌声を親子で思う存分楽しんでもらえるファミリーコンサートです。

劇団俳優座公演「復活」
ヒロインに栗原小巻さん
●十一月五～七日　中ホール

平成三年度芸術祭賞を受賞した俳優座公演、トルストイ原作「復活」をロゼシアターでご覧いただけます。ヒロインのカチューシャ役には、俳優座の看板女優、栗原小巻さん。俳優座の芸術理念は「今日の新しい世界を演劇によって新しく表現すること」。今回の公演も新しい解釈による脚色がなされています。脚本自体は原作に忠実ですが、その場で創り上げて行く作業をとても重要視しています。

「舞台は、TVや映画のように記録としては残りません。でも心に残ります。舞台は生き物、その日その日で違います。公演場所やお客様それぞれの反応によって随分変わることがあります。ロゼシアターでは、演じる私たちだけでなく、創り上げていく素晴らしさを皆さんと共に感じていきたいですね」と栗原さんからのメッセージ。あなたも是非客席から舞台づくりに参加してください。

栗原小巻

色彩豊かな音の世界
荘村清志ギターコンサート
●十一月九日㈫　小ホール

ピンと緊張した弦としなやかな指使いの接点から生まれる色彩豊かな音色は、荘村清志さん独特のもの。クラシックギターの巨匠、スペインのナルシソ・イエペスに師事した彼は、日本において「テクニック、音楽性とも第一人者」との高い評価を得ています。国内外でリサイタルを行う一方、NHK教育テレビ「ギターを弾こう」の講師としても活躍。人気と実力を兼ね備えた本格的なギタリストです。

今回のゲストはフルートの圓城三花さんです。

圓城三花

荘村清志

個性的なピアノが感動を生む
イーヴォ・ポゴレリッチ ピアノコンサート
●十一月十六日㈫　大ホール

一九五八年ユーゴスラビア、ベオグラード生まれの若手ピアニスト。十一歳の時モスクワへ移住し、中央音楽学校やチャイコフスキー音楽院で研鑽を重ね、イタリアのカサグランデ・コンクール（一九七八）、モントリオール国際ピアノコンクール（一九八〇）で優勝。以後世界各地で華々しい活躍をしています。

ショパン、ベートーベン、シューマンなど吹き込まれたCDはどれも好評で、ゆっくりした曲は緊張感に満ちた演奏を、また速いテンポの曲は卓越したテクニックでファンに新鮮な感動を与えています。来日ごとに評価を高めてゆく注目のピアニストが富士市に登場します。

イーヴォ・ポゴレリッチ

コンチネンタル・タンゴが小気味よい
マランド楽団コンサート
●十一月十日㈬　大ホール

マランド楽団

コンチネンタル・タンゴの雄として、世界的な評価を受けているマランド楽団。この楽団は、オランダ生まれのマランドが一九三九年に設立したもので、当時アルゼンチンからヨーロッパへ演奏旅行に来ていた楽団のタンゴに影響を受けて、マランド独自のヨーロッパ風タンゴが誕生しました。

自作自演のタンゴ「オレ・グアッパ」が大ヒットし、マランドの名は世界的に揺るぎないものとなりました。一九八〇年、マランドは亡くなりましたが、娘婿にあたるエヴァート・オーヴァーヴェグに楽団は継承され、今も小気味よいマランド・サウンドを聴かせてくれます。

TOPICS from NOW

トップアーチストの誠実で深みのある演奏
前橋汀子ヴァイオリンコンサート
●十二月三日㈮　中ホール

日本のみならず国際的に高い評価を受けている我が国のトップアーチスト。桐朋学園、レニングラード音楽院、ニューヨークのジュリアード音楽院で研鑽を積んだ彼女は、現在日本を代表するヴァイオリニストとして実力、人気ともNo.1。

毎年一〇〇回近いコンサートを行う彼女の演奏は「魂のヴァイオリニスト」、「常に新鮮な演奏を聴かせる音楽家」と言われるように、集中力に富んだ誠実で深みのある演奏は特に定評があります。演劇だけでなく、音楽的にも優れた音質を誇る中ホールでお楽しみください。

前橋汀子

みなさんご存知、女性演歌No.1
石川さゆりコンサート
●十二月五日㈰　大ホール

昨年で歌手生活二十周年の〝石川さゆり〟。「津軽海峡冬景色」「恋唄」「天城越え」など毎年確実にヒット曲を出し、女性演歌部門のトップの座を不動なものにしている。

中学三年でデビュー、以後二十年間歌一筋に歩み、円熟した女性像を「三分間のドラマ」に凝縮し表現する、得難い歌手に成長。

ロゼシアターの初公演では、冴えた「さゆり節」で心地よい演歌の世界へ私達を誘いこんでくれるでしょう。

石川さゆり

演者の絶妙の間　幽玄の美
能・観世宗家公演
●十一月二十八日㈰　中ホール

室町時代、猿楽や田楽の能やその他の舞を取り入れて完成した能は、幽玄の美を本態とする象徴的芸能で、今日の日本文化を代表する芸能といえます。この能を完成させたのが観阿弥清次、世阿弥元清親子。その観阿弥の芸名が「観世」で、以後同家歴代の能役者は「観世太夫」と呼ばれ、後には同家の姓が「観世」となりました。

明治維新で能の座が解体した後には、分家や別家と区別して「観世宗家」と呼ばれています。現家元の清和氏は第二十六世にあたります。

ロゼシアターの本格的な能舞台で、能のもつ絶妙の間と幽玄の美を心ゆくまでご堪能ください。

華やかさに歴史の輝きを添えて
ロシア・キーロフ・バレエ公演
●十二月十五日㈬　大ホール

キーロフ・バレエは、ロシア最古のバレエ団としてモスクワのボリショイ・バレエとともに世界的に有名です。今から二百十年前、世界で最も美しいと言われる都市サンクトペテルブルク（旧レニングラード）に、キーロフ・バレエは帝室バレエ団として誕生しました。当初からロシアバレエの本流を歩み、チャイコフスキーの「白鳥の湖」などバレエ、オペラの傑作を初演しています。

得意な演目として「眠れる森の美女」ほか数多くありますが、その中からロゼシアターでは「くるみ割り人形」を上演する予定です。

キーロフ・バレエ団

豪華ゲストと楽しくライブ&トーク
林哲司「富士ルネッサンス」コンサート
●十二月二十六日㈰　大ホール

富士市出身のシンガーソングライター。代表作には「悲しい色やねん」、「悲しみが止まらない」「北ウイング」など多数。また、「ハチ公物語」などの映画音楽も手掛けており、現在エッセイスト、TVキャスターとしても人気上昇中。

林さんが開くコンサートの名は「富士ルネッサンス」。ロゼシアターのオープンを機に、新しい富士の文化を発信していこうと大張り切り。このコンサートを盛り上げるゲストは、財津和夫、来生たかお、エポの三人。観客を引き込んでのライブ&トークをお楽しみ下さい。

林　哲司

三枝成彰氏が作曲した富士市のオリジナル曲発表
新日本フィル・コンサート
●平成六年一月三十日㈰　大ホール

富士市が作曲家の三枝成彰氏に依頼していた、富士市のオリジナル曲がいよいよ完成し、その初演がロゼシアターで行われます。この曲はピアノコンチェルトで市民の合唱付きとなります。また氏は、先に札幌市でヴァイオリンコンチェルトを作曲して評判をよんでおり、富士市ではこの曲を広く紹介しながら、全国に文化情報を発信してゆく予定です。

演奏は、日本でトップクラスの新日本フィルハーモニー交響楽団、指揮は堤俊作さん、ピアノは神谷郁代さんです。

ここに掲載した公演のほかに、平成六年三月までの間、二十本近い企画を準備しています。現在の予定では、公演内容、チケット発売日料金、申込み方法などを盛り込んだ総合案内紙（タブロイド版）を、六月五日に市内各戸に配布することになっています。

ROSÉ THEATRE Q&A

▲大通り交差点から撮影（平成5年4月）

“ロゼシアターは、こんな劇場です”

富士市のカルチャーゾーンとして、中央公園・潤井川大橋・青葉通りと富士見大通り交差点周辺が様変わりしてきました。
ロゼシアターの建設もいよいよ佳境に入り、完成に向けての槌音が高まっています。
白い御影石も紺碧の空に美しく映え、文化の殿堂としての趣を呈してきました。
ロゼシアターは他の劇場とどこが違うの？ハード面はどうなっているの？ソフト面は？
そんな疑問にこの建物のコンサルタント会社、㈱シアターワークショップ代表の伊東正示氏に答えていただきました。

1、ロゼシアターは、他の劇場と比較してどんな特徴がありますか。

これまでの公立文化会館は2ホール型で、大ホールが鑑賞活動、小ホールが創造活動を中心とした多目的ホールとするのが一般的でした。

それに対して、ロゼシアターには大、中、小三つのホールがあります。そして、ホールの規模によって上演に適する舞台芸術のジャンルも異なってくるため、大は音楽を主体、中は演劇を主体、小はピアノの発表会などの小音楽会を主体としたホールとしています。

つまり、ロゼシアターは高いレベルで音楽や演劇を鑑賞し、また上演できるように、3ホール型とし、各ホールごとに使われ方を設定する**主目的ホール**としているのです。

▲完成間近の大ホール（客席をのぞむ）

◀大ホール壁面

2、主目的ホールについて、わかりやすく説明して下さい。

舞台芸術にはいろいろなジャンルがありますが、多目的ホールはすべての演目に対して平均点をとろうとするホールです。それに対して、主目的ホールは、ホールの客席数やその地域での文化活動の傾向、上演が期待されている演目などを検討して、主となる演目を設定します。そして、その演目の上演に最適のホールを作るのですが、専用ホールと異なる点は、最新の技術を駆使して舞台の空間を変化させたり、音響を変えたりすることによって、他の演目にも使えるようにします。つまり、主目的とする演目には百点を目指し、それ以外の演目にも合格点がとれるようにするホール、それが主目的ホールです。

3、ホールをはじめ他の施設が沢山ありますが、その使い方は

ロゼシアターには三つのホールの他に展示室やレセプションホール。リハーサル室、練習室。会議室や和室。情報コーナー、レストランなどが設置されています。こうした施設はロゼシアターが日常的な文化活動の場としても市民の皆様に利用されるように設置するものです。

文化活動はまず人々が集まることから始まります。コンサートや演劇・公演などを見にくるだけではなく、日常的な練習や打合せにも気軽にロゼシアターを利用してほしいのです。ロゼシアターに行けば新しい人々にも出会うことができ、最新の情報も得られる。そういう施設作りを心掛けました。

4、活気あふれる文化活動を行うには

文化を育てるためには、ロゼシアターが主体となっていろいろな事業に取り組んでいかなければなりませんし、そのためには毎年たくさんのお金が必要です。文化を育成するための資金を有効に活かす方法は、市民の一人ひとりが積極的に参加することです。観客が満員のコンサートでも、ガラガラのコンサートでもかかる経費はほとんど同じです。いかに多くの市民がロゼシアターを利用するかが、成功のバロメーターとなります。富士市民が一年に二回公演を見にくるだけで、日本一の利用者数のホールになる筈です。年間四十万人の観客動員をめざして、市民全員で努力してほしいのです。

5、付属施設もグレードの高い作りになっているようですが

これまではホールをはじめ文化活動に適した十分な施設がなかったにもかかわらず、様々な文化活動が行われており、かなりの成果を上げてきています。こうした活動をより発展させていくためには、機能的で使いやすい施設が必要です。さらに、活動の活性化はレベルの向上につながっていくのですから、施設作りにあたっては、将来を見越したグレードを設定して、二十一世紀を迎えてもロゼシアターが富士市の文化の中心であり続けることができるように考えています。

6、壁、フロア、椅子などの作りは

ロゼシアターは音響性能や舞台設備など、上演する人々にとって必要な機能を充実させてあり、演奏家や役者の皆様から高い評価を得られるものと確信しています。それと同時に、観客にとっても素晴らしいホールでありたいと考えています。特に、観客の皆様が直接触れる部分については、材質や色彩、手ざわり、肌ざわりなどに十分な配慮をしています。椅子も長時間座っていても疲れず、また緊張感を保てるデザインとしています。また、小ホールも大ホールと変わらないグレードとしていますので、アマチュア団体の発表会もプロの公演と同じ雰囲気で楽しむことができます。

▲大ホール座席

▲中ホール座席

▲小ホール座席

7、これからの、地方文化のあり方は

全国的な傾向として、国内外の一流のプロを呼んで公演をやることだけでは、満足できなくなっています。ホールの建設を契機として、新しいオーケストラや合唱団、劇団などを組織したり、地元の文化団体が協力し合ってオリジナル作品を作ったりという動きが強くなっています。

盛岡劇場では毎年全国から創作戯曲を公募して上演作品を選定し、盛岡の劇団やコーラスグループ、舞踊団、劇場で働く技術者、演劇部の生徒たち、そしてオーディションで選ばれた一般の人たちが力を合わせて、ひとつの作品を手作りしています。プロの劇団のような芸術的完成度は望めませんが、さわやかな感動があり、これからの地方文化の在り方を示唆する活動だと思います。

プロフィール

伊東正示（いとうまさじ）

1952年東京生まれ。76年早稲田大学理工学部建築学科卒業後、同大大学院で劇場建築の研究生となる。文化庁第2回国立劇場設立準備室を経て、'83年株式会社シアターワークショップを設立、ホールや劇場の施設・運営に関するコンサルティングを行う。アクトシティ浜松、銀座セゾン劇場、川口市総合文化センターなど、現在まで60を越える劇場・ホールの設立に参画している。

"トキメキ"のある文化、吸引力のあるホールを

富士市に縁のある著名人。今回はさまざまなメディアで活躍し、自ら「アストラルアーツ」を主宰。プロデューサーやプランニングもこなすコミュニケーター、山田美也子さんにインタビューをさせていただきました。

まずは富士市とのかかわり合いを――

「父が十六の時、中国から留学生として日本に来ました。大学を卒業し、父は父なりにいろんな夢があったようですが、三十を過ぎた頃から飲食業を営むことになり、三十五の時、知人の紹介で吉原中央駅の隣の星二ビルの六階に『北京』を出店しました。私はその頃小学校の低学年で、春、夏、冬などの休みの時には、常に富士の父の所へ遊びに行っていました。」

その頃の富士市の印象はどうでした?

「当時から製紙業も盛んで、東京などの大都市とは違った活気がありました。富士市というと雄大な富士山と大地があり、土の香りがする所だと思います。父は現在でも富士で暮らしていますし、長い間とどまっている一つの理由に、この大地を感じる（中国大陸のイメージですね）ということがあると思います。富士って土地柄や気候、住んでいる人達がおおらかで、お人好しでこだわりがなく、笑い顔がきれいでしょう。外から入って来た人間を取り込んでくれる雰囲気が良かったんだと思います。私も『北京』でお手伝いをしたり、大棚の滝や白糸の滝へ遊びに行ったり、初めて野外でスケートをしたり、吉原の商店街の人達からも気さくに声をかけられたりと、季節ごとにとても楽しく過ごした想い出が沢山あります。」

このお仕事に入ったきっかけですが――

「大阪の下町で育った関係から標準語を習うため、小学校三年の時大阪児童劇団に入り、NHKのラジオやテレビに出演するようになったのが始まりです。大学生の時には二年休学してNHKの『ステージ101』に、その後はテレビ朝日の幼児番組『パンポロリン』、フジテレビの『おはようナイスデー』、NHK『ETV8文化ジャーナル』と『おはようジャーナル』、FM『N響ベストオブクラシック』など、芸能というよりは放送の世界の中で、時代の流れを自分身の体で見て来たという感じですね。」

山田さんというと、メディアの中で自ら動いて情報発信している方というイメージが強いんですが――

「五年前に企画制作会社『アストラルアーツ』を設立し、今までとは違い、プロデューサーがプランニングから全てを仕切る新しいスタイルを考えています。これからやって行きたいことの一つに、文化情報の発信があるんですが、今、ラジオやテレビというメディアで、ニュースキャスター、スポーツキャスター、芸能リポーターの方はいますが、文化キャスターはいないんです。経済・行政・ファッション・音楽など、時代の流れの中でいろいろなことが発生していますね。その中で取材し報告する文化キャスターが日本では育っていません。この部分で私なりに出来ることがあるのではないかと思っています。」

では最後に、富士市の文化、あるいはロゼシアターに対し望むことは――

「顔の見える（個性のある）劇場になってほしいですね。ソフト面の充実はもちろんですが、劇場は人が人を呼びます。ネットワークを作り、キーパーソン、特に一番大きなマスターキーとなる本物を見きわめる方を置いて、吸引力のあるホールに育ってほしいですね。良い文化を創るって、とても時間のかかることです。人間一人の力で出来ることって限りがありますよね。音楽のアンサンブルと同じで、協力したり、組み合わせることの楽しみを見つけてほしいですね。私が今実感していることに、世の中の中年の方、特に男性に多いんですが、"トキメク"ことに出会ってないように思えるんです。クリエイティブな方向とは、自分から投資をして"トキメキ"や楽しみを見つけることだと思います。本当に仕事のできるプロジェクトを作り、文化をトータルで活かせる仕掛けを見つけて下さい。

――どうもありがとうございました。

コミュニケーター

山田美也子

PROFILE

やまだ　みやこ／大阪府生まれ。
NHK大阪放送児童劇団、大阪音楽大学声楽科(ソプラノ)卒業。
3才の時よりクラシックバレエ・ピアノ・絵画を、その後声楽・ジャズダンス・ポピュラーソング等を学ぶ。
NHK「ステージ101」・テレビ朝日「パンポロリン」歌のお姉さん・フジテレビ「おはようナイスデー」キャスター・
NHK「ETV8文化ジャーナル」キャスター・NHK「おはようジャーナル」リポーター等を経て、
現在はテレビキャスター・エッセイ・講演・司会・ミュージカル俳優・パーソナリティなど、
さまざまなメディアを通し多岐にわたり活躍中。また、情報サービス・企画制作会社
「アストラルアーツ」を主宰し、イベントプロデュース・商業プランニングなども手掛けている。
著書に自伝的エッセイ「ちぢれっ毛の天使クン」(講談社)がある。

真の音楽は、人と人をつなぐ絆

富士郡伝法村（現富士市）の農家に生まれた私は音楽の環境などとはまったく無関係であったのですが、小学校（当時は国民学校）での唱歌（音楽）の時間に先生から褒められた事によって、歌を唱う喜びを知りました。やがて高等学校に進み合唱部の一員に加えてもらうことにより、故岡田香積先生と出逢うことができました。今にして思えば、そこで受けた師の音楽に対する情熱が私の心をとらえ、将来音楽の道へ進むきっかけとなったのです。

師の指揮のもとNHK合唱コンクール県大会優勝、学生コンクール東日本大会混声合唱の部優勝をおさめ我々合唱部員は有頂点となりました。私は卒業後、まわりの反対を押切って東京に出て本格的に歌の勉強をすることになります。生まれて初めて歌のレッスンを受けた時、それまで気づかずやってきた自己流の発声、自己流の解釈が「浪曲じゃないんだよ」と一蹴され奮起させられました。個人レッスンという形で教えを受けた事がなかった私は、しばらくして音楽のレッスンが可能だという事実が信じられない気がしてきました。教える事も教わる事も具体的な事実として存在し得ない様な気持ちを強くもつようになりました。

レッスンとは、ある人が音楽をする、そうすると音楽に触れた人が音楽出来るようになる、そういう「触れあい」の関係しかないのではないかということです。人間と人間あるいは人生と人生の接触だけでしか音楽における師弟関係はおこり得ないのではないかということ、音楽のレッスンそれ自体で音楽家を育てあげる事は不可能ではないかと思うようになりました。私は幸いに故立川清登、故友竹正則と二人の実演家としての師に恵まれました。聴衆のために演奏し誰かに聴かれる事を意識し、聴き手の心を動かす事を念じて演奏する、そこに真の音楽が生まれ、聴き手と演奏者である自分を繋ぐ絆が生まれる、そういう手段だけが本当の意味で演奏家としての自分を生かす事だと悟りました。

その後、東京混声合唱団に入団し本格的に演奏活動に入るのですが、この合唱団は我が国の作曲家と共同で新しい日本の合唱曲の創作と演奏を最大の目的としている職業合唱団です。活動の中で私が最も注目し好んで演奏する曲に、柴田南雄作曲の「追分節考」があります。この曲はステージから聴衆に訴えかける今までの演奏スタイルを打ち破り会場全体そのものの空間をフルに使って演奏します。「シィアターピース」という形をとり、男声部は客席の間に入り、時には歩き回りながら演奏します（音源が流れる様に移動する）。音素材は信濃追分を中心に碓氷峠付近の馬子唄、坂本宿の雲助唄、種々の追分節、尺八、断片のハミングの八種類です。女声部は八種類のハーモニーと明治初期の楽理書「上原六四郎の俗楽旋律考」の朗読をステージ上で演奏し、指揮者は棒を振るのではなく会場の響にあわせて音空間を即興的につくり上げて（演奏者は指揮者の指示にしたがって示されたパターンを演奏する）ゆきます。ですから二度と同じ演奏はあり得ません。私は歌手（坂本の雲助唄の独唱）であったり指揮者であったりしますが、劇場の音空間の中で、ある時は聴衆を村人達に感じたり森や林の中の動物達だったり、林の静寂であったり、朝であったり夕方であったり想像を凝らして演奏を創りあげます。聴衆の感性に飛び込んで行くことにより、そこに集った人々との間に「触れあい」が生まれ演奏が成立します。

いまはオーディオが発達し形の上で完璧な演奏、音質の良さを追求する人達が増えています。それも結構な事だと思いますが、音楽を聴くという事は会場に足をはこんで人間と人間が触れあい、心のかよった演奏に接するという事も大切ではないでしょうか。

我々はもう百二十余曲の合唱曲を創作し国内だけでなく海外でも演奏しており、特に「追分節考」は日米舞台芸術交流（第一回）で海外公演し、ニューヨーク、ワシントン、ボストン、シカゴ等で好評を博しアメリカ合唱界にショックを与えました。「ロゼシアター」完成の暁には市民の皆さんの前で私の追分節考が演奏出来ます事を夢みております。

東京混声合唱団コンダクター

遠藤　猛

PROFILE

昭和11年　富士郡伝法村(現富士市)片宿生まれ　伝法小学校、吉原第一中学校、
吉原高等学校を経て　昭和30年　東京声専音楽学校入学、
昭和32年　東京コラリアーズ(日本最初の職業男声合唱団)入団、昭和33年　国立音楽大学入学
昭和37年　東京混声合唱団入団現在同団コンダクター・イン・レジデンス、
昭和51年　文化使節としてアセアン５ヵ国で演奏、昭和62年　第１回日米舞台芸術交流
日本代表としてアメリカ東部８都市で演奏、富士市立丘小学校校歌作曲、
富士市連合婦人会の歌作曲、日本児童教育専門学校講師、混声合唱団「一葉会」、
放送大学混声合唱団、女声合唱団「葡萄の会」等の指揮者。

EVENT INFORMATION

富士市のいち早くホットな文化情報を満載

プレイベント（平成5年）

5・15(土) '93MAYコンサート

富士市出身の新人音楽家による演奏会（富士文化センター）

第1部　新人音楽家による演奏会
第2部　上野の森プラス公演

知る人ぞ知る実力と人気を兼ね備えた金管五重奏団。抜群のテクニックと豊富なレパートリー、そしてユーモアあふれる話で舞台と客席を一つにさせてしまいます。

'93MAYコンサートポスター

7・29(木) 林哲司&クラクラ SOUND DERIVERY（富士文化センター）

出演　林哲司　ゲスト　クラクラ
内容　第1部　クラクラコンサート
　　第2部　林哲司トーク「ぼくとHITTLESとEUJ」
　　第3部　林哲司&クラクラトークライブ

この愛＝音(OTO)届きますか。

「林哲司」もう一つのプロフィール

彼のプロフィールについてはこの誌面をはじめ、さまざまな所で採りあげられているので、ここでは角度を変えて紹介してみよう。十五年以上にも及ぶキャリアの中で、彼は常に一貫したバックボーンを持って活動している。

●コンポーザー林哲司

洋楽指向の強い音楽性を日本の土壌にマッチさせ、繊細なオリジナル感覚をブレンドした、そのメロディーラインとサウンド。松原ミキ「真夜中のドア」、竹内まりや「セブテンバー」が広く世間に受け入れられると、コンポーザー"林哲司"の時代は幕を明ける。稲垣潤一、上田正樹、杏里、杉山清貴をはじめ、数多くのシンガーに曲を提供。彼の言う「ポピュラリティー」、つまり、リスナーが本当に望んでいる音楽を創っていく姿勢が、現在の地位を築いている。

●アーティスト林哲司

一九七二年、チリ音楽祭入賞をきっかけに、「ブルージェ」「バックミラー」「サマーワイン」「ナインストーリーズ」と不定期ではあるがオリジナルアルバムを出し、ハハ年には集大成「タイムフライズ」を発表。そして九〇年夏、初のインスト・アルバム「islands in The Stream～海流の中の島々～」では、海外レコーディングと注目のグループ「マラヴォワ」や「サキコ」、アレンジャー「クリスチャン・ゴバール」とのセッションなど、ボーダレス九〇年を象徴する一枚を発表。さらに現在は、音楽の原点を見つめ、自由とオリジナリティーを求めたニューアルバムで新たな方向を提示している。

●エコロジスト林哲司

初のインスト・アルバム「islands in The Stream～海流の中の島々～」がそうだったように、彼は今『水』に深い関心がある。「今一番こだわっているのが水。海のシリーズはライフ・ワークにしたい。」と言っている。現在住む三島市の隣町を流れる名水「柿田川」を守るナショナルトラスト運動にも参加し、海のシリーズではライフ・ワークとして第二・第三の企画を進行中。今後の彼の、さらなる活躍を期待したい。

林　哲司

クラクラ

究極のコンビニエンス・クラシック・トリオ（クラクラ）とは

芸大、そして同大学院を卒業し、ヨーロッパ留学経験アリの華麗なキャリアと実力を持つナゾの美女三人。その三人が、クラシック音楽と他のジャンルの音楽とを「激突」、つまりクラシックをクラッシュ（crash）させるという意味で、「クラクラ」というグループができあがった！

現在、日本クラシック界において演奏活動をしているため全員素性がばれないよう、黒いサングラスで顔を隠し、奇抜で楽しい衣装で「変装」しています。（正体がバレたらクラシック界では大騒ぎになりますから…）

富士文化センター

5・2(日)　アニメ映画大会
5(水)　小さな音楽会
15(土)　新人演奏家コンサート
6・5(土)　アニメセンターまんが映画会
12・13(日)　演劇公演
20(日)　長編アニメ映画「うしろの正面だあれ」上映会
7・3(土)　第41回定期演奏会
10(土)　富士ミュージフルートアンサンブル定期演奏会
24(土)　ソプラノリサイタル
29(木)　林哲司コンサート

吉原市民会館

5・16(日)　ブレーメン
25(水)　富士厚生年金受給者協会吉原支部大会
6・5(土)　教職員組合富士支部定期大会
19(土)　長編アニメ映画「うしろの正面だあれ」
20(日)　自主文化事業ぬいぐるみ人形「ピーターパンとフック船長」
27(日)　静岡県歌謡グランプリ
7・4(日)　静岡カラオケ大賞選抜大会
18(日)　三味線発表会
31(土)　日産自動車㈱吉原工場創業50周年記念式典

・お問い合わせは吉原市民会館　52－0740

プレイベント鑑賞のポイント

第1弾のMAYコンサート、5月の演奏会ということで名付けた。今春音楽学校を卒業した若手音楽家たちによる演奏会、将来名演奏家となって帰ってくることを期待してご声援ください。6月には学校コンサート、昨年好評を博した打楽器によるコンサートを今年も行う。市内6中学校の体育館において華やかなリズム楽器のオンパレード、中学生の血潮をたぎらせる。

続く第3弾、林哲司&クラクラSOUND DERIVERY今までにないユニークな公演、林さんのトークをメインにクラクラトリオの音楽が色彩りを添える。12月にロゼシアターに出演する林さんの熱き思いがあふれたステージとなる。ぜひご来場ください。

Pick Up People

●シリーズ・富士の文化活動に参加する人々 ③

富士面（おもて）の会

このコーナーでは毎回、富士市でさまざまな文化活動を展開しているサークルやグループを紹介しています。今回は、不思議な魅力と美しさを持つ、能面を制作している「富士面の会」です。

美しさと深さ…打てば打つほど魅せられる面の世界。

能面の美しさに魅せられ、自ら打ってみようと、横浜の能面師・岩崎久人師の元へ通っていた、この会の代表・斉藤孝誠氏。同じ想いの人達と、平成元年七月にこの会を発足。現在では会員も十五名、第二を除く毎週月曜の正午から六時まで、月三回のペースで御幸町公会堂で能面打ちを楽しんでいる。

老後の友として選んだという斉藤氏をはじめ、皆とても真剣な顔。横浜から来る岩崎師と助手の石原さんの、厳しくも暖い指導で、なかなか妥協しない一徹さを教えられ、会員の糧ともなっている。年齢層は四〇代半ばから七〇代まで。若い方の問い合わせも沢山あるが、月曜の昼間の集りのため、若い人の参加がないのが残念。年に一回能面展を開催し、一年間の成果を発表。今年は、オープンとなるロゼシアターで十二月三日から一週間を予定。今から楽しみだという。

工程を簡単に追うと、型取り→アラ彫り→中彫り→仕上げ彫り→ウラ塗り→下地塗り→仕上げ（彩色）となる。完成まで四ヵ月前後、一日六時間は苦にならず、時の流れを忘れるぐらいだとか。

日本古来の芸術の根源ともいわれる能面。その不思議で幽玄な美に心をうたれ、皆そのとりこになり、すっかりのめり込んでいる感じ。「何事も楽しいことは活力を与えてくれる」と、斉藤氏。目標はできる限り長く継続して行くこと。創ることの難しさがそのまま楽しみになり、面の美しさ深さが、自然にノミや筆の動きになっているようでした。詳細及びお問い合わせは下記のとおりです。

能面の美しさを見つけませんか？

●日時／毎週月曜日PM0:00～6:00（第2月曜は除く）
●場所／富士市御幸町6-9 南町・御幸町公会堂
●参加対象／年令・経験すべて不問
●会費／月20,000円
問い合わせ／斉藤孝誠（〒417富士市石坂459-4 TEL.0545-21-5633）まで

編集後記

新緑したたる春本番を迎え、財団へ四月から若葉マークの新人が加わり体制が一新された、いよいよフルメンバーでキックオフだ▼本誌の表紙も春の装い、陽光に透けるパレットをロゼシアターに見たてその上の花や新芽はさまざまな色をもった公演、イベントアーティストたち、筆代りとなったマドラーは財団スタッフを象徴、ロゼシアターがこれからどのように彩られるか大いに気になるところ。オープニングに向けてみなさん素敵な色を調合してください。▼富士市にゆかりのある著名人に文化会館を語ってもらっている、功成り名を遂げた方々のひと言ひと言は郷里への思い入れとともにズバリ核心をつく。また文化鑑賞論を含めこのシリーズに市民から声援が送られてきていることも嬉しい。末永くごひいきに。

富士市文化情報紙 ロゼ
一九九三年五月発行（第三号）
発行
富士市文化振興財団
〒四一七
富士市永田町一丁目一〇〇番地
TEL（〇五四五）五一－〇一一三㈹
企画・編集
富士市文化振興財団
アドスペース　エービック株式会社